

まちの情景と建築

田中 修一

都市計画

震災復興 リスボン・リベルターデ大通り



▲ リベルターデ大通り 道路間の緑地



▲ アルファマ地区 地平線にサン・ジョルジェ城



1755年11月1日ポルトガルのリスボンを直下型の大地震が襲った。市の人口27万5千人のうち9万人(6万2千人との説もある)の死者が出たという(津波1万、圧死2万、火災その他で6万人)。宰相セバスチャン・デ・カルヴァーリョは、死者の埋葬、食糧調達、住宅建設、道路整備にいち早く着手する。中でも被害が最も大きかったバイシャ地区を重点に都市計画を断行。まず南北の動線上の軸線を設定する。北から南のテージョ川の河口(と言っても川幅は広く、海のような)。大航海時代は世界を駆け巡った船が、この港から発着した。ポルトガルの経済活動の中心地)に向かって、エドワード7世公園⇒ポンバル交差点(後に彼はポンバル侯爵となる)リベルターデ大通り(遊歩道の緑地を含み幅員80m。しかしポルトガルの国民は、散歩の習慣がなかったので、あまり活用はされなかった)⇒ロシオ広場(異端審問所、ドミニコ修道院、サントス病院など、公共・王家の広場としての色が濃い)⇒コルメシオ広場(当時の王ジョゼ1世騎馬像を配置したが、ブルジョア中心の商業易広場とする。市民の存在を前面に出す政策の表れ。東西192.5m×南北177mと、広大なエリアを確保した)と繋げる。この軸を中心に東西に格子状の住宅街区を展開した。

当時のリスボンは、他のヨーロッパの都市も概ねそうだが、きわめて生活態度も衛生状態も悪かった。汚物やごみはアパートの窓から道路に放り出す。悪臭は大変なもので、中世を通じてペストの大流行が繰り返されたのは当然と言えるほど環境は最悪だった。そこでカルヴァーリョは都市改造を断行するにあたって、二つのことを実行する。

- ①住宅は4階建てとし、1階は店舗、2階はベランダ付き(こうすれば上からごみを投げ捨てることのできないのが狙いのだろうと想像するのだが)、3階は窓付き、4階は屋根裏部屋で、屋根は切妻に統一する。窓にはガラスを設け、悪臭対策としたというのだからいかにひどい状態だったかは想像に難くない。
- ②住宅は木造だが、細かい正方形の格子組の外壁で覆う=鳥かご方式。耐震性を高めるのが目的で、①②を合わせてポンバル様式と呼んだ。右上の道路右側のアパートはその名残を示している。



震災で生き延びた街区もある。この地区の東側にあるアルファマ地区などはその一つ。複雑に迷路が入り組み、中世の面影を残している。リスボンはやたらに坂の多い地形なので、余計に複雑に見える。こんなところに市電が走っているのだから驚きだ。子供が飛び乗ったり、車が間に挟まったり、危険極まりない。しかしその下町風情がよいのだろう。アルファマとはアラブ語で「水の湧くところ」の意味。嘗てのイスラム支配の名残だ。ポルトガルの哀愁を漂わす民謡がファドだが、日が暮れると物悲しいファドの歌声に誘われて酒場に引き込まれるのも、この場所の醸し出す独特の雰囲気と言えらう。